第33回 カンボジアにおけるSDGsと教員改革 ―カンボジアに関わって30年

行方市SDGs推進アドバイザー・茨城大学教授　野田　真里

1. 新生カンボジア30年と日本

2023年は、私の長年のフィールドである東南アジアの王国、カンボジアにとって、記念すべき年です。30年前の1993年、日本の明石康国連事務次長を特別代表とする、国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）により、長年の戦乱を経て和平後初めての総選挙が実施され、新生カンボジア王国がスタートしました。カンボジアはこの30年間、順調な復興・開発を遂げ、今世紀約7％の高い経済成長率を誇っています。東南アジア大陸部の大国、タイとベトナムの間に位置し、地政学的な重要性も高まっています。日本は、カンボジアの平和と復興・開発に大きな役割を果たしてきました。

せんえつながら、私も時を同じくして、カンボジアへの国際協力や研究・教育に従事、本年でカンボジアに関わらせていただいて30年となります。この7月、コロナ禍後初めて現地を訪問することができましたので、日本とも関係の深いカンボジアについてご紹介したいと存じます。

2. 戦乱による教育へのダメージとSDGs目標4

元来、カンボジアは大変豊かな自然と文化を有しています。国際河川であるメコン川流域に位置し、東南アジア最大の湖であるトンレサップ湖もあります。こうした肥沃な国土に恵まれ、UNESCOの世界遺産・アンコール遺跡等の素晴らしい文化が育まれてきました。

他方、カンボジアはフランスからの独立後、国際社会の荒波に翻弄され、長く戦禍に巻き込まれてきました。特に1975―79年のポル・ポト政権時代、急進的な共産主義政策が進められました。人々は劣悪な強制労働へと駆り立てられ、知識人は弾圧され、多くの人々が命を落とし、貴重な人材が失われました。

教育も大きなダメージを受け、学校教育は廃止され、教員は弾圧され、その影響は今でも続いています。カンボジアの教育は日本をはじめとする国際社会の支援もあり、アクセスは大幅に改善しました。他方、SDGs目標4（質の高い教育）の観点からしますと、「学校にいけない」こともさることながら、むしろ「学校に行っても学んでいない」ことが問題で、学習危機（learning crisis）と呼ばれています。

3. 質の高い教育に向けた教員改革

教育の質の向上において特に重要なのが、質の高い教員の確保です。SDGsのターゲット4・cでは「2030年までに、開発途上国…における教員養成のための国際協力などを通じて、資格のある教員の数を大幅に増やす」とされています。

現在、カンボジアは大きな教員改革を進めており、その中核となるのが、日本の国際協力による教員養成大学（TEC）です（写真）。従来、初等教育や前期中等教育の教員になるためには、中等教育修了（12年）後に2年制の教員訓練校（TTC）で学ぶ必要がありました。これを、日本と同じく学士号を取得する4年制大学に改め、教員の質の向上を図っています。私も微力ながら、カンボジア政府・教育スポーツ青年省（MoEYS）と協力して、教員改革に取り組んでいます。

▶首都プノンペンの教員養成大学（TEC）（筆者撮影）